

夏目漱石

初秋の一日



初秋の一日

汽車の窓から怪しい空を覗のぞいていると降りだしてきた。それが細かい糠雨ぬかあめなので、雨としてよりはむしろ草木を濡ぬらす淋さびしい色として自分の目に映った。三人はこのごろの天気を恐れてみんな護謨合羽ゴムがっぱを用意していた。けれどもそれがいざ役に立つとなると決して嬉しい顔はしなかった。彼等らはその日の佗わびしさから推おして、二日ふつかご後に来る暗い夜よるの景色を想像したのである。

「十三日に降ふったらいへんだなあ」とOが独ひとりごと言いのよ

うに言った。

「天気の時より病人が増えるだろう」と自分も気のなさ
そうに返事をした。

Yは停車場前で買った新聞に読み耽ったまま一口も物
を言わなかった。雨はいつのまにか強くなって、窓硝子
に、砕けた露の球たまのようなものが見えはじめた。自分は
閑静な車両のなかで、先年英国のエドワード帝を葬ほうぶつ
た時、五千人の卒倒者を出したいだことなどを思い出したり
した。

汽車を下りて車に乗った時から、秋の感じはなお強く

なった。幌ほろの間から見ると車の前まへにある山が青く濡れ切
 っている。その青いなかの切通きりどおしへ三人の車が静かに掛
 っつてゆく。車夫は草鞋わらじも足袋たびも穿はかずはに素足すあしを柔かそう
 な土の上に踏み付つけて、腰の力で車を爪先つまさき上のぼりに引き上
 げる。すると左右を鎖とぎす一面の芒すすきの根から爽さわやかな虫の
 音ねが聞えだした。それが幌を打つ雨の音に打ち勝つよう
 に高く自分の耳に響いた時、自分はこの果はてしもない虫の
 音に伴つれて、果しもない芒の簇むらりを目も及ばない遠く
 に想像した。そうしてそれを自分が今取り巻かれています
 秋の代表者のごとくに感じた。

この青い秋のなかに、三人はまた真赤な鶏頭を見付けた。その鮮やかな色の傍には掛茶屋めいた家があつて、縁台の上に枝豆の殻を干したまま積んであつた。木槿かと思われる真白な花もここかしこに見られた。

やがて車夫が梶棒を下した。暗い幌の中を出ると、高い石段の上に萱茸の山門が見えた。〇は石段を上るまえに、門前の稲田の縁に立って小便をした。自分も用心のため、すぐ彼の傍へ行つて顰に倣つた。それから三人前後して濡れた石を踏みながら典座寮と書いた懸札の目に付く庫裡から案内を乞うて座敷へ上つた。

老師に会うのは約二十年振ぶりである。東京からわざわざ会いに来た自分には、老師の顔を見るやいなや、席に着かぬまえから、すぐそれと解わかったが先方では自分をまったく忘れていた。私はと言って挨拶あいさつをした時老師はいやまるでお見逸みそれ申しましたと、あらためて久濶きゆうかつを叙したあとで、久しいことになりますな、もうかれこれ二十年になりますからなどと言った。けれどもその二十年後の今、自分の目の前に現れた小作りな老師は、二十年前とたいして変ってはいなかった。ただこころもち色が白くなつたのと、年のせいか顔にどこか愛嬌あいきょうが付いたの

が自分の予期と少し異なる^{こと}だけで、他は昔のままのS禅師であった。

「私ももうじき五十二になります」

自分は老師のこの言葉^{ことば}を聞いた時、なるほど若く見えるはずだと合点^{てん}がいった。実をいうと今まで腹の中では老師の年齒^{とし}を六十ぐらいに勘定していた。しかし今ようやく五十一二とすると、昔自分が相見^{しょうけん}の礼を執ったころはまだ三十を超えたばかりの壮年だったのである。それでも老師は知識であった。知識であったから、自分の目には比較的^ふ老けて見えたのだらう。

いっしよに連れて行つた二人を老師に引き合せて、
 巡錫じゆんしゃくの打ち合せなどを済すました後あと、しばらく雑談をし
 ているうちに、老師から縁切寺えんきりでらの由来やら、時頼夫人ときよりの
 開基かいきのことやら、どうしてそんな尼寺へ住むようになった
 たわけやら、いろいろ聞いた。帰る時には玄関まで送っ
 てきて、「今日は二百二十日だそうで……」と言われた。
 三人はその二百二十日の雨の中を、また切通きりどおし越こえに町の
 方へ下くだつた。

翌朝あくるあさは高い二階の上から降るでもなく晴れるでもな
 く、ただ夢のように烟けむるKの町を目の下に見た。三人が

車を並べて停車場ステーションに着いた時、プラットフォームの上には雨合羽を着た五六の西洋人と日本人が七時二十分の上り列車を待つべく無言のまま徘徊はいかいしていた。

御大葬と乃木大将の記事で、都下で発行するあらゆる新聞の紙面が埋うずまったのは、それから一日置いて次の朝の出来事できごとである。

(大正一・九・二二)

日本文学電子図書館

初秋の一日

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第10巻」角川書店
昭和42年10月10日 6版発行



日本文学電子図書館